

実践報告

実践的カリキュラム・マネジメントの高度化及び体系化

——個別最適な学びと協働的な学びの創出に向けて

平井 正朗*

*神戸山手女子中学校高等学校

Advancement and Systematization of Practical Curriculum Management

– Toward the creation of adaptive learning and collaborative learning

Masaaki Hirai*

* Kobe Yamate Girls' Junior & Senior High School

The author has been involved in the management of three private schools and in public educational administration as a member of the Osaka City Board of Education, and has since developed curriculum management and has achieved some success. At the same time, the author has continued the research (2015, 2017, 2020, 2022a) at the International Society for Education, focusing on the construction of a theory of curriculum management.

In this paper, we use a case study of Kobe Yamate Girls' Junior & Senior High School, which has been working on school improvement, and discuss the advancement of curriculum management that has been practiced so far, as well as the adaptive learning and collaborative learning that are being promoted in the systematization of this curriculum management.

The most important factors are the maintenance of motivation and the establishment of the PDCA cycle. The role of the teacher is not only teaching subject content, but also facilitating “how to study”. We believe that coaching is a golden opportunity for homeroom teachers to enhance students' non-cognitive skills. The curriculum management that we aim for is the creation of an educational environment where students can absorb cutting-edge knowledge through industry-government-academia collaboration, build a system to connect with society and the world, and think, judge, and express themselves flexibly in diverse ways of life and society.

Keywords: curriculum management, adaptive learning, collaborative learning

キーワード : カリキュラム・マネジメント, 個別最適な学び, 協働的な学び

* 〒650-0006 神戸市中央区諏訪山町6番1号 神戸山手女子中学校高等学校

Correspondence concerning this article should be sent to: Masaaki Hirai, Kobe Yamate Girls' Junior & Senior High School, Suwayama-cho 6-1, Chuoh-ku, Kobe, 650-0006, JAPAN

Email: masaaki_hirai@kobeyamate.ed.jp

1. はじめに

筆者は私学 3 校の学校経営及び大阪市の教育委員として公立の教育行政に関わる機会を得て以来、独自のカリキュラム・マネジメントを展開し、一定の成果を収めてきた。同時に、国際教育学会において、その理論構築をテーマとした研究（平井 2015, 2017, 2020, 2022a）を継続している。本稿では、学校教育改革に取り組んでいる現任校を事例に、これまで実践してきたカリキュラム・マネジメントの高度化を図り、その体系化の中で推進している個別最適な学びと協働的な学びについて考察する。

2. 時代背景とコロナ禍の教訓

文部科学省によれば、年間 30 日以上登校しない小中学生は 2021 年度には前年よりもさらに約 5 万人増加、過去最多の 24 万人に達し、約 10 年でほぼ倍増している¹。不登校の児童生徒の学びの充実を図る教育機会確保法が成立したのが 2016 年である。さらに、コロナ禍も重なり、登校を基本にしながらも個別最適な学びに向かっている。しかし、欧米ほどホームスクーリングへの支援体制が整っているわけではない。実態として、学びの保障が経済力に左右されることや学校やフリースクールなどとの接点にも課題が残されている。発達障害者支援法（2005）は、子供への教育的支援を求めているが、同省の調査では、発達障害の可能性のある小中学生 8.8%（35 人学級に 3 人）が発達障害の可能性のあるものの、約 4 割が授業中の座席配慮や支援を受けていない²。また、特別支援教育の専門家から定期的に助言してもらっている小中学校が 14.8% という状況からも情報共有の不十分さが浮き彫りになっている³。このような状況は、これまでの一斉授業を通じた学校文化からの変容を意味する。その一助となるのがデジタル技術の活用である。デジタル教科書は、漢字に読み仮名をふったり、音声で読み上げたりする機能があり、読み書きが得意でない子供の理解を促進する効果が期待されている。授業で扱う文章をデジタル端末上で目立たせたところ、発達障害がある子供の集中力が向上し、直線のゆがみが強く気になる子供は端末上で直線を引く機能を使うなど、個別最適化が見られたことは特記事項である。

障害に関係なく、同じ学級で学ぶ仕組みはインクルーシブ教育と呼ばれ、相互理解を深める効果があるとされ、世界の潮流となっている。米国は連邦法で、障害があっても可能な限り、インクルーシブ教育を進めている。支援が必要な子供の 9 割以上が通常学級に在籍しており、特別な支援を週に何時間受けるかといった個別最適な学びを融合している。フィンランドは、特別な支援を受け

る子供の6割超が通常学級で学んでいる⁴⁾。日本は明治維新から高度経済成長期まで工業化が社会課題であり、マニュアルに従った仕事をする均質な人材が必要とされたため、学校では画一的な教育が求められてきた。しかし、デジタル社会を迎えた今、必要なのはイノベーションを起こせる人材を育成できる学校教育なのである。

With/After コロナ時代と言われる中、教育現場には様々な課題が散見される。コロナ禍の課題として、子供の成長期におけるコミュニケーションが希薄になったことが懸念されている。感染リスクがない状態でもマスクを取りたがらない子供がいる。学習端末の活用については、教員、学校、地域によって温度差があり、8割の学校がうまく活用できないと指摘する専門家もいる⁵⁾。学校に「行かない」と「行けない」という登校規範が崩れかかっている中、デジタル教材等を活用した個別最適化を推進し、「学びの選択」を用意するのが教師の役割と言える。同時に、「開かれた学校」づくりに向けて、ブラック校則などを見直すことで学校に対する価値観を変えることも急務である。

小中高の教育現場では、学校の“主役”である生徒をサポートする教員不足が深刻化している。教職の魅力を現場から発信するという「教師のバトン」という文部科学省の企画も空転した。教員採用試験の早期化など、教員の養成・採用・研修を一体で改革する指針が出されているが、教師が子供の成長に関わることができる素晴らしい仕事であることを発信する仕組みづくりが希求されているのである。

3. カリキュラム・マネジメントの事例研究

－神戸山手女子中学校高等学校を例にして－

3.1. 生成AIの時代の教育

チャット GPT に代表される生成 AI が話題になっている。生産性が向上し、GDP が7%上昇すると予測されている。さらに、開業医やマーケッター、翻訳者といった知的職業まで代替する可能性があるという⁶⁾。かつて、テクノロジーが文明を築きあげてきたように、生成 AI が飛躍的な経済成長につながる期待感が高まる一方、偽情報やサイバー犯罪が危惧され、規制の必要を求める声もある。当然、ガイドラインやルール作りも加速するのは当然である。現在の生成 AI はビッグデータから画像・音・テキストを認識・分類し、ルールを導き出すレベルであり、自律的な思考やゼロからの創造を行っていないわけではない。そこに人間の活路が見出せる。働き方改革への対応も含め、産官学でその方法を模索することになる。民間の研究・開発は日進月歩であり、AI 教材が

普及しているのは周知の通りである。強みはデータを解析し、生徒の到達度に合わせて問題を出し、学習履歴を作成するなど、まさに個別最適化に特化している点である。経済産業省の『未来の教室』における EdTech (Education + Technology) 教材がその先駆けであった。学習効率を向上させ、学びの生産性を最大化させるだけでなく、情報をひもづけ、自己調整学習を可能にする。コロナ禍で AI 教材が一気に普及した結果、見えてきた課題が生徒のモチベーションの維持、そしてファシリテーターとしての教師の役割である。教師は「勉強のやり方」を教え、学習習慣を定着させなければならない。海外の一部の学校では校内での生成 AI の利用を禁止しているが、校外での利用は止められないだろう。教科指導の大命題が物事の本質を見極める力をつけることとするならば、そのためには多様性を尊重しつつ、「思考力、判断力、表現力」を身につけるカリキュラムへのアップデートが不可欠である。個別最適な学びと併せて、探究学習において社会のリアルな問題に対し、ディベートで背景知識を共有して表現力を育成したり、芸術分野で創造性を高めたり、ボランティア活動に参加して学習履歴をつけるなど、協働的な学びへ連動させ、総合力を育成する取り組みが必要である。高度な知能をもった生成 AI が登場すれば人類の真価に向けて教育実践の成果が問われるのは必至である。生成 AI が人間を凌ぐ言語能力を獲得しようとしている今、知的作業を担い始めるテクノロジーとどう向き合うべきか、人間にしかできない能力開発や教育の質の向上には産官学のチーム力が欠かせないのである。

現任校において、AI 教材を用いた個別最適な学びを全校導入しているが、成果の顕著な例として、不登校生指導に関するインタビューを紹介する⁷⁾。

F 氏：御校では不登校（気味）の生徒のための学習支援室が作られ、素晴らしい成果を挙げておられるとお聞きしております。ご紹介願ってもよろしいでしょうか？

平井：はい。教室に入りにくい生徒が楽しんで学校に来て、夢を叶えてくれることを願って、EdTech 教材を使って個別最適化学習が可能な KOKO ROOM (学習支援室) を新設しました。中高合わせて 14 名の生徒が利用し、13 名が改善傾向を示しました。専門の先生方が改善・回復したと見做した割合を「改善率」と呼んでいますが、割合でいうと 92.9% ということになります。(図 1)



F 氏：すごいですね。カウンセラーもかなり配置されていると聞いていますが
....

平井：ええ、専任スタッフも含めて5名います。昨年から姉妹校関係にある関西国際大学の心理学部にも協力していただき、授業のある日(月～土)は毎日、来校していただいています。(臨床心理学専攻の大学院生の実習も行なっています)また、KOKO ROOMのとなりの部屋にはカウンセリングルームを作り、生徒だけでなく、保護者の方も利用できるようにしています。

F 氏：手厚いですね。本日、一番お聞きしたいのは校長先生が推進されている個別最適化学習についてです。

平井：本校では1人1台のタブレットの環境があり、学びの保障として、学校目標である「進路満足度100%」の達成に向けて、オンライン双方型授業(同期型)、オンライン授業アーカイブ(非同期型)、EdTech教材による個別最適化学習(非同期型)を行なっております。

F 氏：もう少し詳しく説明を頂戴してもよろしいでしょうか？

平井：オンライン双方型授業は文字通り、KOKO ROOMであっても自宅であっても授業が行われているのと同時間に遠隔で授業に「出席」すること。オ

ンライン授業アーカイブは、その授業に参加できなくても後で録画した授業が視聴できるものです。また、EdTech教材とは到達度に応じて自学自習できるオンライン教材であり、本校では3年前から導入しています。

F氏：評価はどのようにされているのですか？

平井：ペーパー試験だけでなく、課題レポートも課し、中高生が将来の大学受験に必要な知識を習得していただけるよう工夫した上で総合評価しています。教科によってはルーブリック評価を活用したり、集中授業を組み込んだりすることもあります。オンラインによる探究学習や校内予備校も行っていく予定です。

F氏：校長先生が着任されて以来、御校の個別最適な学びから協働的な学びへという方向性は評価が高いですね。

平井：ありがとうございます。

F氏：私も御校のシンポジウムに参加させていただき、実感しました。一番共感したのが、その根幹とも言えるカリキュラム・マネジメントです。皆さんの興味があるところですので、解説をお願いします。

平井：学習指導の一環として、生徒1人ひとりにタイム・マネジメント・シートを作成してもらっています。学習計画シートですね。大切なのは「予定は未定」が現実ですから自己調整する力をつけながら振り返りができる、つまり、PDCAサイクルが回せる習慣をつけることです。ここは教師の腕の見せ所と言ってもよいでしょう。定期考査の答案が返却された後はリフレクション・アワーといって振り返りの時間を設け、担任のコーチングを通じて自己調整を図っています。これは本校独自のやり方で、全生徒に取り組んでもらっています。フルクラウド統合型校務運営システム「Blend」も校務の効率化に役立っています。

F氏まさに個別最適化ですね。カリキュラム・マネジメントを実践する上で留意されていることがあれば教えてください。

平井：エビデンス・ベースの説明責任です。先生方には、毎時間、学習の目標を明記するだけでなく、生徒が「〇〇ができるようになった、〇〇の本質がわかった」と言えるようにしてほしいこと、定期考査・模試分析会の結果は生徒・保護者と共有すること、研究授業は年2回実施し、ノウハウ吸収と課題発見を行うこと、学校評価・授業満足度の結果は学校として振り返りを行い、改善点と対策を公表するが、各自の問題として捉えることなどをお願いしております。

F氏：期待は膨らむばかりです。クラブでもデータサイエンス部にeスポーツを

併設されたとか.... 不登校（気味）の生徒も積極的に参加され、大人気ということですが....

平井：確かにそうです。本校では兼部している生徒も多く、3人からスタートしたデータサイエンス部は30人を超えました。

F氏：いろいろな取り組みが散りばめられており、本当に魅力的な学校になりましたね。

平井：可能な限り、「学びの選択」を用意して、地域に開かれた学校にしたいと思います。

3. 2. 学校評価との関連

2021年度、着任以降、学校評価は年2回実施している⁸⁾。設問は40問あり、「わからない・無回答」を除いて「(やや)あてはまる」と答えた割合を達成率としている。2022年度を振り返ると、全体（第1回、第2回）の平均達成率は82.8%であり、内訳は生徒75.9%、保護者77.1%、教職員92.2%であった。事業計画に示した高3の卒業段階での「進路満足度100%」の達成状況として、生徒94.6%、保護者92.9%となり、保護者・教職員からの評価で「要改善」（60%未満）は皆無となった。私立学校は、固有の文化や風土によって醸成されているため、経営手法は多様性に富んでいる。しかし、教学面は、生徒確保、学力保障、進路保障、設備面は安心・安全が前提であり、入学（入口）、教育内容（中身）、進路（出口）の三位一体改革を進め、財政を安定させ、良循環型の学校経営に資するべく、中長期にわたる事業・財政計画を策定するのが共通項である。以下、私学の独自性の事例についての筆者へのインタビューから抜粋する⁹⁾。

K氏：「進路満足度100%」を掲げた学校改革が順調と伺っております。2024年にいよいよ創立100周年を迎えられ、時代が求める学校創りが着々と進められているのですね。

平井：ありがとうございます。

K氏：成果の程をお伝えいただいてもよろしいでしょうか？

平井：はい。今春の卒業生は現役合格率、進路満足度（生徒・保護者）が9割以上、難関・有名大学合格に加え、姉妹校関係にある関西国際大学への入学者数は最多となりました。探究学習では、6,000名以上が参加する高校生アントレプレナーシッププログラム『高校Ring』（リクルート）で2年連続ファイナリスト5名に選出されました。個別最適化学習では『Eフ

ェスタ』(リクルート)において、高1と高2が全国上位にランクインしました。クラブ活動の加入率は9割を超え、全国大会常連である陸上部は過去最高の記録ラッシュ、マンドリンギター部(38年連続)とアーチェリー部(6年ぶり)も全国大会に出場、吹奏楽部は県のコンクールで2年連続金賞に輝く、KOKO ROOMでの不登校気味の生徒の改善率は9割を超えるなど、目に見える成果が現れ始めています。

K氏：凄い躍進ぶりですね。いよいよ体制が整ってきた感じですね。

平井：それだけではありません。2021年の改革以降、データサイエンス部、広報部、卓球部の増設、高大連携プログラム『関西国際大学進学プロジェクト』、校内予備校『山手アドバンスゼミ』、KOKO ROOMとカウンセリング・ルーム等々、100周年後の“あるべき姿”を見据えた取り組みは今、始まったばかりです。

K氏：同窓会とも連携しているとお聞きしました。

平井：例えば、データサイエンス部は、広報部の生徒たちとともに、約6万人を擁する同窓生のバックアップの下、卒業生が営む店を訪問、インタビューに加え、様々な体験をさせてもらい、その模様をInstagram制作に活かしています。

K氏：拝見しました。御校のInstagramですが、素晴らしいですね。生徒と教員が作っていると聞きましたが本当ですか？

平井：本当です。すべて自前です。多いときは20万件以上のアクセスがあります。今年からeスポーツ部を併設し、部員は約10倍になりました。

K氏：広報にも使えるレベルですね。新設のグローバル選抜探究コースはとても評判がよいですね。ご紹介をお願いします。

平井：中高共に週10時間以上の英語の授業時間を確保し、担任はネイティブと日本人の二人制、中学は『プロGRESS』、高校は『Grammar in Use』が主教材です。英語イマージョン授業もスタートしました。週1回2時間連続の英語+音楽、英語+家庭科、英語+プログラミングを行なっております。

K氏：英語でプログラミングをしている学校は珍しいですね。いや、時代の先端をいっておられると思います。もう少し詳しく教えてください。

平井：『V-code』(イージア)という教材を使い、マイクラフトを使うことでプログラミングに対するハードルを下げ、動画、文字、音声を使う環境が生徒の論理的思考力を高めることを目的としています。(図2)

[New] 英語＋プログラミング

「V-code」活用による英語イマージョン

➡ 中学:「技術家庭」「英語」 高校:「情報」「英語」



図2 英語プログラミングの授業

K氏: 先程, 見学させてもらいましたが, 生徒さんたちの生き生きとした表情が印象的でした. 校長の月例面談もされているとか. 保護者として安心でしょうね.

平井: 月例の校長面談では海外にいる保護者とのオンライン・ミーティングなどもあり, 世界が近く感じられます.

K氏: グローバルですね. 行事もかなり豊富とお聞きしました.

平井: 英語の行事は多く, すでに「SPRING ENGLISH WELCOME PARTY」を開催, 大好評でした. 8月29日から31日までは三木キャンパスで「グローバル探究キ

ャンプ」が企画されました. English Roomでは, 英語のみならず, 日本語が必要な生徒のための日本語教室も開講, 海外経験豊富な卒業生がボランティアで定期的に指導してくださっています.

K氏: 御校には以前から海外にルーツをもつ生徒がかなりいると聞いていましたが, 国際都市にふさわしい学校になりつつあるのがよくわかりました.

平井: 今や中国, 韓国, フィリピン, 台湾, ブラジルなど, 国際都市にふさわしいものになってきたことは喜ばしい限りです.

K氏：個別最適化学習に向けて、全クラスともタイム・マネジメント・シート（学習計画シート）を作成しているそうですね。

平井：はい。生徒は各自の計画に基づき、自己調整しながら日頃の学習を進めます。そして、定期考査を受けた後で、リフレクション・アワーで自分自身の取り組みを振り返り、担任のコーチングを通じて個別最適な学びに直結させます。一方、教員は部門別検討会、定期考査・模試分析会、公開研究授業、大学入学共通テスト勉強会等を行い、エビデンス・ベースの情報共有を心がけています。

K氏：精度の高いカリキュラム・マネジメントですね。期待が膨らみます。まとめの一言をお願いします。

平井：先生方をお願いしているのは生徒たちに物事の本質を見極める力をつけてほしいということだけです。授業デザインは、素材研究、教材研究、指導法研究が基本ですが、最も大切なのがモチベーションの維持と PDCA サイクルの定着。教師の役割は教科の内容を **teaching** するだけでなく、“勉強のやり方”を **facilitating** することが AI 時代のポイントになります。担任にはコーチングが非認知能力を高められる絶好の機会になると申し上げております。また、今年から情報一元化を図る意味で、フルクラウド統合型校務支援システム「Blend」を導入したのを機に、可視化を進め、より一層、カリキュラム・マネジメントを深めていく所存です。生徒諸君には、教養は短時間で身につくものではなく、これだけ覚えれば大丈夫というものではないので、時間をかけて学び、先生や友だちと対話していただくこと、そして、あらゆる角度から情報を集めて、最新の知のトレンドをつかむことをリポートし、幅広く、深く学ぶ姿勢を求めています。

学校評価における課題と対策は年間指導計画に組み込んでいるが、以下のように要約できる¹⁰⁾。

- ・ 生徒、保護者と教職員の評価にギャップがある。生徒主体の教育実践に向けて、モチベーションの維持、**teach** から **facilitate** する学習指導・生徒指導のあり方を強化する。同時に、全教職員が現実を再認識した上で、ワークショップ等を盛り込み、OJT（On the Job Training）を通じて資質向上をはかる。
- ・ 2022 年度より個別最適化学習が可能な「KOKOROOM」とカウンセリング・ルームを新設した。常時、来室した生徒の改善率は 92.9%であった。KOKO ROOM の認知度に関しては、生徒（49.2%）と保護者（85.2%）

に差があることから、生徒への認知度を向上させていく。

- ・ 授業における「きめ細やかな指導」（生徒 65.3%，保護者 68.7%，教職員 87.9%）については、個別最適化された学びを定着させるために、学年と教科、担任と保護者が連携を密にして学習内容の定着をはかる。また、教員は素材研究、教材研究、指導法研究を奨励し、公開授業でスキルを高め、授業改善を行う。
- ・ 授業における「探究活動」（生徒 65.7%，保護者 70.7%，教職員 78.8%）と「SDGs と社会貢献」（生徒 73.3%，保護者 64.1%，教職員 88.2%）については、全校体制での取り組みに向けて、「探究教育推進委員会」を新設する。教科横断的取り組みを行うのと同時に、生徒の「思考－判断－表現」する場面を増やす。
- ・ 「読書教育」（生徒 60.0%，保護者 62.%，教職員 94.1%）については、図書館と国語科が中心となって朝読の質を見直し、「読む」習慣を再構築する。また、ビブリオバトル、関西国際大学の図書館ツアー、電子図書館、読書講演会等を実施した後の生徒の具体的な活動を学校行事に位置づける。
- ・ 私学の独自性における「建学の精神」（生徒 68.6%，保護者 71.9%，教職員 96.2%）については学年の年間小テーマの中に位置づける。「生徒会活動」（生徒 69.4%，保護者一，教職員 88.2%）については、多くの生徒が参加しやすいイベントを増やすのと同時に、日々の活動をさらに広報していく。「地域交流」（教職員 61.8%）については保護者会（育友会）、同窓会（友松会）と連携して地域の方々が参加できるイベント等を開催することによって、交流を深めていく。

3. 3. カリキュラム・マネジメント・ストラテジー

現任校では、「進路満足度 100%」をスローガンに掲げ、積極的に授業改善に取り組んでいる。授業の先にあるものは、物事の本質を見極める力の育成である。生徒はタイム・マネジメント・シートを作成し、PDCA サイクルを回しながら担任のコーチングを受けている。そして、振り返りの時間となるリフレクション・アワーを活用して、自己調整を図りながら、探究学習に代表される協働的な学びにつながる個別最適な学びを実践している。（図 3）



図3 タイム・マネジメント・シートを用いた自己調整学習

カリキュラム・マネジメントの一環として、定期考査分析会、模試分析会、研究授業、教育シンポジウム、部門（人文系、理数系、芸術・体育系）別検討会、大学入学共通テストの勉強会等々を組み込んでいる。例えば、定期考査分析会は年5回実施しているが、すべての教科担当者が誤答分析を行い、リフレクション・シートにコメントを記入、次回の考査を見据えることで気づきにつながり、教師自身の自己調整によるPDCAサイクルに貢献している。完成したシートは生徒・保護者に配信、課題と対策が可視化するので、学習方略が立てやすくなっている。教科主任は各教科の全体像を把握した上で、成果や課題を分析会や部門別検討会で報告し、情報が全体で共有されるように努めている。教員は学期ごとに授業を録画し、授業を見直すことでスキルアップをはかっている。

授業デザインに向けての素材研究とは、何のために教えるのかという指導の目的を明確にし、言語材料そのものを深く研究、本質を追求することに他ならない。英語や国語の物語文を例にすれば、登場人物、ストーリー、文章表現、

筆者のメッセージなどを深く理解することにあたる。教員は、日々、多忙であるが、そのような取り組みが言語材料となる素材の魅力に気づかせてくれるのと同時に、教材化のヒントになり、授業をやりやすくしてくれるのもまた事実である。

教材研究は、新出単元に関する専門的知識を深め、教材そのものにどのような教育的価値があるのか、また、どのような構造なのか、そして、どのように位置づけるかを明らかにした上で実際の授業を想定して、指導案を作るまでの過程で行うものである。当然、生徒の到達度に合わせて、担当するクラスの指導目標、勤務校で言えば、コース・コンセプトや学習指導要領との関連に留意しておかなければならない。教材研究の肝は、言語材料をどのように扱えば、最も効率的に生徒の学力を伸ばせるかという点である。

何を教えるのが教材研究 (WHAT) なら、どのように教えていくのが指導法研究 (HOW) ということになる。いずれにせよ、素材研究と教材研究をしっかりと行うことが授業づくりの土台であり、ここに教師がオリジナリティを発揮できるチャンスがある。そして、その積み重ねが熟練した教師を創り出していくのである。生徒の成長に立ち会えるのが教師の最大の喜びなら、教師の成長に立ち会えるのが学校の財産なのである。

評価の基準となる考査の作問については、2020年度から基礎・基本の理解度を測定する A 問題 50 点 (正解率 80%程度)、標準的レベルの B 問題 30 点 (正解率 50%程度)、発展的レベルの C 問題 20 点 (正解率 20%程度) で構成されている。2022年度から新学習指導要領や大学入試改革を見据えるのと同時に、教科の特性も踏まえたものに改良した。例えば、英語なら A 問題は「知識問題」とし、語彙・語法+テキストの内容理解、B 問題は「思考・判断問題」とし、テキストの更に深い内容理解、C 問題は「表現問題」とし、部分英作や自由英作などを問うといった具合である。

年2回実施している研究授業は教科内のコミュニケーションだけでなく、部門別、もしくは第三者評価を組み込むことによって、効果的な OJT (On the Job Training) として機能している。さらに、日頃の取り組みは「授業満足度調査」で数値化されるので自己調整しながらアクション・リサーチを加味している。

面談週間では、担任が生徒に対し、自己の経験や知識に基づき教え導く teaching だけでなく、直面する課題に対し、最適解・納得解を創り出す coaching の手法も取り入れてアプローチしている。技能習得に直結する teaching に加え、時には生徒と対等な関係を保ち、共感や傾聴の姿勢から気づきを与え、主体性を育てつつ、目標達成に向けていく coaching のバランスを重視している。一

人ひとりのポテンシャルを最大限に引き出すファシリテーションが自己調整による個別最適化学習を可能にするのである。

3. 4. カリキュラム・マネジメントのツール

コロナ禍は、一人一台の端末環境の整備から始まり、個別最適な学びを加速させるのと同時に、新学習指導要領が標榜する協働的な学びに連動させた。前者の代表的なツールが EdTech 教材、後者の代表的な指導形態が探究学習である。その意味で、経済産業省の『未来の教室』が果たした役割は大きい。現任校を例にすれば、「学びの選択」を可能にし、多様化する生徒の進路を実現するために、産官学協働を打ち出し、教育実践に資するようになっている。学校教育改革をスタートさせた 2021 年、経済産業省の『先端的教育用ソフトウェア導入実証事業』における実証校として、複数社の EdTech 教材を仮採択、半年間で精査した。現在、中学では 5 教科の教科書準拠版『デキタス』（城南進学研究社）、高校では『スタディサプリ大学受験講座』『スタディサプリ English』（リクルート）、数学で『Qureous』（河合塾）を導入している。2023 年からは新設したグローバル選抜探究コースを対象としたイマージョン教育の一環として『V-code』（イージア）を採択した。『スタディサプリ ENGLISH』の『E フェスタ』では、高 2 が全国 11 位、高 1 が全国 17 位になるなど、効果が見られた。今年から校内の情報一元化を図る意味で、フルクラウド統合型校務支援システムを導入し、エビデンス・ベースの可視化に努めている。

教訓となるのは、双方向システムとなるオンライン同期型と学習管理システム（LMS: Learning Management System）によって進捗状況を把握できるオンライン非同期型のハイブリッド化である。特に、非同期の場合、自己調整しながら勉学に取り組み、到達度をリアルタイムで把握できるものの、教師は学習者自律（learner autonomy）に結びつけることが求められる。時代は変容し、「主体的・対話的で深い学び」と言い方は変われど、不易流行を改めて再確認させてくれるものである。しかし、日本独特の伝統的な学校文化がある以上、「点」を「線」にする具体策が不可欠である。教師の力量開発は本人の努力もさることながら、「チーム学校」としての戦略的取り組み、つまり、カリキュラム・マネジメントによって昇華するのである。そのツールとなるのが、LMS である。勤務校では、カリキュラム・マネジメントのツールとして、フルクラウド統合型校務支援システム「Blend」を導入した。教員の声をまとめると、「出欠席については朝の電話対応がなくなり、生徒対応に集中できるようになった」「ホームルーム、授業の欠席、遅刻状況の共有や保健室との連携がスムーズに

なった」「学習記録機能を活用し、学習履歴（ポートフォリオ）を一元管理できるようになった」「ペーパーレス化に加え、生徒・保護者・教員への連絡において情報を確実に伝えることができるようになった」「アンケート機能を活用した学校評価・授業満足度調査が簡易になり、回収率がさらに向上した」「入試管理など、これまでパートで処理してきた校務が効率化され、働き方改革に対応できるようになった」など、肯定的な意見が多く聞かれるようになってきている。

文部科学省は、教員の経験則に依存する授業からの改善を目途に、デジタル端末に蓄積された学習データを活用する方向性を打ち出している。重要なのはデータを利用して質の向上を図ることである。日常の学習状況と学力との相関が可視化され、効果的な指導法の開発が進めばより客観性・信頼性・妥当性のある個別最適化学習が期待できる。また、OJTを通じた教員の育成にも有益である。これまで日本の学校では、スキルの高い教員のノウハウを継承しながら、指導法を構築してきた感があるが、教員の校務が荷重になっている昨今、校内のデジタル化は働き方改革にも寄与するものである。2024年度からデジタル教科書が導入され、板書中心の一斉授業が転換点を迎える。現任校も「令和5年度学びの保障・充実のための学習者用デジタル教科書実証事業校」となったのを機に、データから得られた知見を積み重ねることにしている。大切なのは、最先端技術を駆使し、生徒のポテンシャルを最大限に引き出すことなのである。

3. 5. 非認知能力の育成

AIの進展は目覚ましく、プログラミングや自動翻訳はじめ、大学入試合格をめざすプロジェクトまで企画されるレベルになっている。AIの“実力”は素晴らしいものであるが、それを駆使したデジタル教育のあり方についてはまだまだ議論の余地がある。EdTechを始めとするデジタル学習ドリルは、AIが解けることが前提となるため、それに依存しすぎるとAIのような考え方をする人間を量産することになってしまい、個性が育たない。また、モチベーションを維持するのが難しく、使い方を工夫しないと集中力が分散してしまう。確率と統計が使われているソフトウェアであるAIは、ビック・データがあれば一定の結果を出してくれることが期待できる。その意味で、学校には人間にしかできない、マニュアルにない、正解が一つとは限らない問題を解決していきける力をつけていくことが求められる。AIは教科書に書いてあることをすべてマスターでき、採点できる問題をすべて採点できるものの、暗黙の了解事項といった言語外情報を読み取ることができないという側面がある。そこで焦点化

されるのが非認知能力である。非認知能力とは、学び続ける意欲や粘り強さ、協調性、想像力、コミュニケーション力といった数値で測りにくいものことであるが、これが人の成長に大きなウェイトを占めていることは言うまでもない。

国際教育学会の西村・八木（2023）は、保護者が子供に対して、声かけと応え方をどのようにしたらよいか、また、子供が問題行動をした時の注意の与え方、好ましい行動をとった時の励まし方について述べられている。子供を叱る時は、「次は頑張ろうね」と励ました方が原因追及や罰よりも成人してからの自立や実行力に効果的であるとされ、叱り方のメリットやデメリットを意識することが重要であると言及されている。調査では、日本の親が行うと思われる叱り方、褒め方を取り上げ、子どもの時の叱り方、褒め方と成人後の自己決定度、安心感、長期的な視点で物事を考える習慣、倫理的行動に与える影響を考究されている。さらに、「長期的な視点で物事を考える習慣は、行動経済学における双曲割引の度合いと関連があり、賞罰が、双曲割引の度合いを高め、遠い将来よりも直近の利得を強く意識するような影響を与えるとするなら、それは倫理的行動にも影響を与えているであろう」と示唆に富むコメントをされている。

日常生活において、親は子供に対し、表情やボディランゲージなどの非言語コミュニケーションを除き、言葉を通じてコミュニケーションをとるのが通例である。当然、それをどのようなにするかで子供の成長にも影響が出ることは自明である。特に、問題行動の際の対応の仕方は子育ての中で親が悩む点でもある。それは教育現場でも同様なのである。

3. 6. 高大連携—協働的な学びに向けて

学習指導要領が改定され、高大接続を見据えて、社会のリアルな諸問題に対する最適解の探究に向けて、グループワークや討論といった協働的な学びが行われている。2020年の法人合併から4年目をむかえる現任校では、姉妹校関係にある関西国際大学との高大連携を2023年度から強化し、キャリア教育の精度を高めることを事業計画の一つとした。将来の職業選択に向けて、保健医療学部、教育学部、社会学部との連携教育を実践している。中学校の教員との対談を抜粋する¹¹⁾。

A 先生：御校に入学した卒業生が先日、遊びに来てくれました。学校生活はとても楽しく、充実したものと話してくれました。

平井：それはよかったです。

A 先生：今年から高大連携をかなり強化されたと伺っております。先日、ある保護者から「山手には看護師になれる道があるようです。姉が卒業生でとてもよい学校と言っていますし、下の子は看護師希望で高校を探していたところだけに情報がほしいです」と相談がありました。オープンスクールに行くように勧めましたが、看護師を希望する生徒が増えてきているときだけに私も情報がほしくて直接、校長先生に面談を申し込ませていただきました。お忙しい中、時間をとっていただき御礼申し上げます。

平井：いえいえ、こちらこそ。今年から将来の職業選択に向けて、姉妹校関係にある関西国際大学の保健医療学部、教育学部、社会学部との連携教育をスタートさせることにしました。文部科学省は学習指導要領の改訂に伴い、高校の多様と学びの選択が加速する中、高校と大学の双方がそれぞれの目的や役割を踏まえつつ、高大接続を柔軟に捉えた取り組みを求めています。それを形にしたということです。

A 先生：山手がどんどんよくなっているという噂は聞いていましたが、いろいろな角度から着々と改革が進められているのですね。具体的にはどのような連携教育を展開されているのでしょうか？

平井：高1段階から大学教員によるオンデマンドミニ講義を平常授業の中に組み込み、さらに、希望者には看護、保育、福祉などの実習体験やワークショップ、特別講義などのプログラムを実施し、「学びの選択」を可能にしています。

A 先生：保健医療学部とはどのような連携をされているのですか？

平井：今年で言えば、6月末から高校の保健体育の授業で大学教員のミニ講座を視聴、ディスカッションし、レポートを仕上げています。8月29日から三木キャンパスで行う勉強合宿では講義と特別プログラムが用意されています。10月14日の教育シンポジウムでは、災害看護学をテーマにした高大コラボ授業をお見せできると思います。

A 先生：かなり本格的ですね。希望者対象ですか？

平井：ええ、もちろん。「学びの選択」ですから。

A 先生：全員が関西国際大学へ進学するのですか？

平井：いいえ。「進路満足度 100%」が学校方針ですから、関西国際大学へ進学する生徒が増えることは想定されますが、国公立大学等に進学する生徒もいます。

A 先生：セーフティネットというわけですね。HPで調べたのですが、看護師

の国家試験合格率が例年、全国平均を上回り、2022年度は98.2%、また、助産師と保健師が100%、実就職ランキングが全国1位（大学通信オンライン調べ）、さらに、防災士の資格もとれるということですからたいへん魅力的だと思います。希望すれば全員が入れるのですか？

平井：人数枠はあるものの、今年から姉妹校としての「姉妹校学習履歴テスト」を設定し、一定の学力があると認められれば一人でも多く入学できるようなシステムを構築しました。

A先生：学力不問になりがちないわゆる附属校推薦に陥らない配慮がなされており、真の高大連携になると確信しました。

平井：興味がある方は、オープンスクールでは助産看護学に関するミニ講座、相談会、ナース服試着などを盛り込みますから参加されるとよいと思います。

A先生：楽しみです。周知させていただきます。これまで実践されたプログラムをご紹介ください。

平井：3月7日、希望する生徒たち約60名と三木キャンパスを訪問しました。学部長による特別講演「保健医療の現状と看護職の役割」に始まり、学科紹介、在学生インタビュー、救急看護や災害現場での看護師に関するミニ講義、スキルスラボや三角巾法といった演習体験、キャンパスツアー等、姉妹校だからこそできるプログラムを用意していただきました。

A先生：最高の環境ですね。

平井：4月12日には秋山正子氏の「訪問看護」という看護職に関するDVD(NHK、プロフェッショナル仕事の流儀)を視聴した後、学部長からご講演いただきました。生徒から「山手に来てよかった。きちんと勉強すれば看護師になれる道が開かれているのだから。高校の授業で大学の先生のミニ講座が視聴できて、希望すれば独自プログラムで夢を実現するチャンスがもらえるのはありがたいです」という感想が聞けたのは学校として最大の喜びです。

A先生：素晴らしいの一言です。校長先生がおっしゃるカリキュラム・マネジメントに基づく個別最適な学びと協働的学びがよくわかりました。御校のさらなる発展を楽しみにしています。

4. まとめ

世界中には最適解・納得解がまだ見つからない難題が山積しており、予測不可能な未来と言われる時代だからこそ、学習指導要領の改訂において、知識伝

達型の教育から脱却した新しい時代に通用する資質・能力の育成が求められ、「主体的に学習に取り組む態度」が重視されている。同時に、AI が人間を凌ぐ高度な言語能力を獲得しようとしている今、幅広い知的作業を担い始めるテクノロジーとどう向き合うかという課題もある。

いつの時代も変化に対応するために、教育がその原点にあることは言をまたない。教育現場が担うべき役割として、人類がこれまで創り上げてきた文化や歴史、哲学を背景知識とできる環境づくりが不可欠である。あらゆる教育活動において、アイデンティティー、レジリエンスといった成長指標を明確にしつつ、内発的動機の上昇を通じて様々なスキルを身につけ、学校から社会へスムーズに移行するようなサポートが求められる。OECD-CERI（教育改革革新センター）は、学校改善（School Improvement）を「教育目標のより効果的な達成を目指し、1校もしくは複数の学校による学習条件やその他関連する内部的条件の変革を目的とした組織的・継続的な努力」としている。

めざすカリキュラム・マネジメントは、汎用的な能力を育てつつ、産官学協働を通して先端的な知を吸収し、社会や世界とつながる仕組みを築き、多様な暮らしや社会のあり方を柔軟に思考、判断、表現できる教育環境の創造であり、その実現が学校改善に資すると考える。

注

- 1) https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_1.pdf
- 2) <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUE0891U0Y2A201C2000000/>
- 3) <https://www.nikkei.com/article/DGKKZO67257310Y2A221C2CM0000/>
- 4) <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUE08BCB0Y2A201C2000000/>
- 5) <https://www.nikkei.com/article/DGKKZO67145540W2A221C2CK8000/>
- 6) <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUC141UU0U3A210C2000000/>
- 7) https://www.kobeyamate.ed.jp/principal_blog/2023/07/929.html
https://www.kobeyamate.ed.jp/principal_blog/2023/07/929_1.html
- 8) https://www.kobeyamate.ed.jp/about/asset/index/greeting/evaluation2022_2.pdf
- 9) https://www.kobeyamate.ed.jp/principal_blog/2023/06/post_630.html
https://www.kobeyamate.ed.jp/principal_blog/2023/07/post_631.html
- 10) https://www.kobeyamate.ed.jp/about/asset/index/greeting/evaluation2022_2.pdf
- 11) https://www.kobeyamate.ed.jp/principal_blog/2023/08/982.html
https://www.kobeyamate.ed.jp/principal_blog/2023/08/982_1.html

参考文献

- 中央教育審議会教育課程企画特別部会 (2015). 『教育課程企画特別部会 論点整理』.
- 西村和雄・八木匡 (2022). 「褒め方、叱り方が子どもの将来に与える影響—日本における実証研究」, 独立行政法人経済産業研究所編 『RIETI』 pp.1-18.
- 平井正朗 (2015). 「私立中高におけるエンロールメント・マネジメントの効果—学校評価との関連」, 国際教育学会編 『クオリティ・エデュケーション』, Vol. 7, pp.105-131.
- 平井正朗 (2017). 「教員の自律的参画と授業改善を志向するカリキュラム・マネジメントの試み」, 『クオリティ・エデュケーション』, Vol. 8, pp.53-76.
- 平井正朗 (2020). 「カリキュラム・マネジメントの体系化に関する継続的研究—アダプティブ・ラーニングの試み—」, 『クオリティ・エデュケーション』, Vol. 10, pp.37-59.
- 平井正朗 (2022). 「With/After コロナ世代のカリキュラム・マネジメント—産学協働による個別最適化学習の構築に向けて—」, 『コロナ後の未来を見据える私学』, 調査資料 258, pp.113-123.
- 平井正朗 (2023a). 「学校経営ストラテジーの再構築—神戸山手女子中学校・高等学校を事例にして—」, 関西国際大学教育総合研究所編 『教育総合研究叢書』 16, pp.201-211.
- 平井正朗 (2023b). 「フルクラウド統合型校務支援システムを通じたカリキュラム・マネジメント」, NPO 学校支援協議会編 『School Management vol.0』, pp.3-4.
- 文部科学省 (2022). 「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm
- Baker, C. H. (2012). *The NAIS Enrollment Management Handbook*, NAIS.
- Harris, A. (2008). *Distributed School Leadership*, Routledge.
- Spillane, J. (2006), *Distributed Leadership*, Jossey-Bass.
- Zimmerman, B. J, Schunk, D. H. (1989). *Self-Regulated Learning and Academic Achievement: Theory, Research, and Practice*, Springer-Verlag Publishing.